日本ホスピス緩和ケア協会

NEWSLETTER ニューズレター

Hospice Palliative Care Japan

No. 17

18.February,2008

日本ホスピス緩和ケア協会事務局
〒259-0151 神奈川県足柄上郡中井町井ノ口1000-1 ピースハウス病院内
TEL 0465-80-1381　FAX 0465-80-1382
Homepage>>http://www.hpcj.org/　E-mail>>info@hpcj.org

ＮＰＯ法人　日本ホスピス緩和ケア協会発足

日本ホスピス緩和ケア協会は、2007年10月31日付で特定非営利活動法人としての登記が完了いたしました。
法人化にあたりご理解、ご協力をいただきました会員の皆様、また関連団体の皆様に、厚くお礼申し上げます。
ＮＰＯ法人として、定款に５つの事業を挙げておりますが、具体的には下記の内容を行っていくことでホスピス緩和ケアの健全な発展を図り、国民の保健・医療・福祉に寄与することを目指しています。
今後とも当協会の活動にご理解、ご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

NPO法人 日本ホスピス緩和ケア協会　理事長　山崎章郎

◆事業内容

啓発普及

ホスピス緩和ケアの啓発・普及のための講演会、セミナーなどの開催。
特に、「世界ホスピス緩和ケアデー」を最終日とした一週間を「ホスピス緩和ケア週間」とし、全国各地でホスピスフォーラム、施設見学会、写真展、音楽会など、さまざまなイベントを通して啓発・普及活動を行う。

教育研修

ホスピス緩和ケアに従事する人材の育成を目的とした教育カリキュラムの開発・多職種対象教育セミナーの開催。
医師・看護師・ソーシャルワーカーなど、職種別教育プログラムなどについても、関連団体と協力しながら進める。

ケアの質の確保と向上

全国のホスピス緩和ケアの提供に関する現状調査とともに、ケア提供者の自己評価、遺族による評価など、ケアの質を評価する調査研究を通して、ケアの質の維持・向上を目指す。

広報・情報交換

ホームページの運営、ニュースレターや小冊子の発行を通した、一般の方、ケアを提供する方々へのホスピス緩和ケアに関する情報の提供。
緩和ケア提供者の情報交換のための年次大会や全国各地で支部会の開催。

連携・国際交流

国内の関連団体との連携の強化と臨床・教育・研究における協働。
"アジア太平洋ホスピス緩和ケアネットワーク"など、世界の緩和ケアの発展を目指す活動への参加、協力。

会員区分について

ＮＰＯ法人となり、会員区分がこれまでのＡ会員・Ｂ会員から、正会員・準会員に変更となりました。

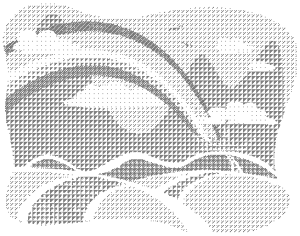
正 会 員…この法人の目的に賛同して入会し、この法人の事業を推進する個人又は団体
協会の提示する『ホスピス緩和ケアの基準』に沿ったケアを提供する病院・診療所・訪問看護事業者等

準 会 員…この法人の目的に賛同して入会し、この法人の活動に参加する個人又は団体
主に保健、医療、福祉を専門とし、あるいはボランティアなどとしてホスピス緩和ケアに関与している個人又は団体

賛助会員…この法人の事業を賛助するため入会した個人又は団体

2008年2月1日現在の会員数　正会員：265　準会員：31　賛助会員：57

２００８年度年次大会のご案内



日　時：2008年 7月19日（土）・20日（日）
会　場：仙台国際センター（〒980-0856　宮城県仙台市青葉区青葉山）
http://www.sira.or.jp/icenter/
大会長：岡部　健（岡部医院　院長）

※申し込みなどの詳細につきましては、４月上旬にご案内予定です。

プログラム（予定）

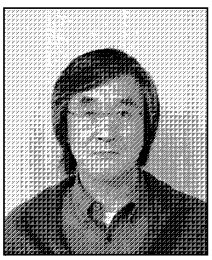
7月19日（土）13:00-17:30

・大会長挨拶
・通常総会
・シンポジウム
「生活者のニーズからみた
在宅緩和ケアのあり方」
・懇親会（18:00-20:00）

7月20日（日）9:00-12:00

・分科会「地域緩和ケアネットワーク
－地域で暮らす人々とともに－」
1）緩和ケアチーム・緩和ケア病棟・在宅緩和ケア
－それぞれの役割と協働－
2）患者の生活の場でいかにチームを作るか
3）家族への支援　－家族アセスメント・家族ケア・
地域における家族支援システムづくり－
・全体報告会
※ 20日午後：サテライトワークショップ（自由参加）予定

年次大会大会長挨拶



2008年度年次大会大会長
岡部　健

2008年度の年次大会のお世話をさせて頂くことになりました岡部です。癌対策基本法等をうけて、一方では厚労省の緩和ケア普及への大きな舵取りの変更、他方ではホスピス緩和ケア協会の法人化など、対応しなければならない問題が山積している状況下での年次大会となります。しかし、将来に向けて対応すべき幾多の問題が象徴しますように、本大会は、今後の緩和ケア普及のあり方を討議する大切な機会と考えています。不慣れですので行き届かないところもあろうかと思います。その点はご容赦いただいて、活発なご討論の上、東北の地もお楽しみいただけたらと考えております。

皆様ご周知の如く、日本の緩和ケアはホスピス病棟の開設以来、医療保険制度の中で育って参りました。病院に作られた緩和ケアチームも同じ枠組みを踏襲しています。しかし在宅ホスピス・ケアは、医療保険制度の中のシステムだけではなく、介護保険、および地域の福祉的、文化的リソースを活用しつつチーム形成して参りました。そのためか、医療保険の枠内で活動してきた取り組みと、介護、福祉、地域文化を視野に入れて活動してきたチームがお互いのあり方をしっかり了解しあうのは、そう簡単なことではなさそうです。

看取りのこと一例をとりましても、医師、看護師が常置されている病院、ホスピスでの看取りと、家族、介護者のみで、患者さんが息を引き取る時間を見守る在宅（介護施設を含む）では、負担のかかる点も意味合いも変わってきます。

このように、氏素性が異なった育ち方をしてきた施設ホスピス、緩和ケアチーム、在宅ホスピス・ケアチームが力をあわせ、お互いに地域の中での役割分担を明確化し、お互いのあり方を理解し合うことが今回の年次大会の最大のテーマだと思います。

もとよりＷＨＯの緩和ケアの定義には、施設だ、在宅だなどの区分は記載されておりません。患者、家族のＱＯＬ、すなわち身体、精神、社会性、霊性全体にわたって支えるという共通基盤に立ち返れば、お互いの役割分担を作って行くことは決して困難なことではないでしょう。

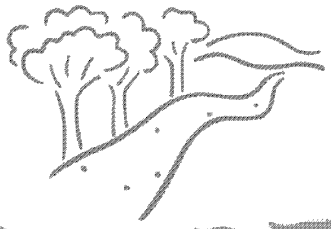
患者、家族の生活の場のまわりに、様々な緩和ケアリソースを、利用目的にあわせて使えるよう構築していくのが我々の役割と理解しております。今回の年次大会の中で、そのような目的に沿うべく、相互理解を深め、真に患者、家族のＱＯＬを支えるためのチームケアの形が模索できればと思っています。是非活発なご討議よろしくお願い申し上げます。

2009年度年次大会　◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

2009年度は７月18日（土）・19日（日）県立広島病院の本家好文氏を大会長に、広島県にて開催予定です。

支部の活動状況

日本ホスピス緩和ケア協会では、毎年7月に年次大会を開催していますが、より身近な場所で、会員同士の情報交換や交流の場を持つことができるよう支部活動を進めています。
各支部では、情報交換事業としての支部会の開催やニュースレターの発行などとともに、会員同士、また、会員以外の方とも学習の場を共有しながら、地域における緩和ケアのネットワーク化、ケアの質の向上を目指し、教育セミナーの開催事業を始めています。また、一般の方も対象とする講演会の企画など、活動を少しずつ広めています。
今回は各支部の活動状況や今後の予定をご紹介いたします。



北海道支部

支部事務局：日鋼記念病院
代 表 幹 事：柴田　岳三（日鋼記念病院）
幹　　事：
石垣　靖子（東札幌病院）
合田由紀子（市立札幌病院）
瀧川千鶴子（恵佑会札幌病院）
中谷　玲二（洞爺温泉病院）
前野　　宏（札幌南青洲病院）
川村三希子（北海道医療大学）
高岡　和夫（札幌社会保険総合病院）
田村　里子（東札幌病院）
福徳　雅章（函館おしま病院）

活動の様子：
2003年7月の北海道における全国ホスピス・緩和ケア病棟連絡協議会年次大会を機に、同年５月に日本ホスピス緩和ケア協会北海道支部（当時の呼称：全国ホスピス・緩和ケア病棟連絡協議会北海道ブロック）が立ち上がり、九州支部に次いで全国２番目の支部が誕生した。以来、年１回の支部年次大会が開催され、今年で６回目を数えることとなり、着々と成果を上げつつある。
昨年、日本ホスピス緩和ケア協会がＮＰＯ法人となり、北海道地区は正会員施設１５、準会員施設２、賛助会員４と順調に会員数を延ばしてきている。
今後は、道内各地に誕生したがん診療連携拠点病院と連携をとりながら、さらに北海道のホスピス緩和ケア、さらにはがんの在宅診療の普及を進めてゆきたいと考えている。

▲ 教育セミナー IN 北海道

▲ 支部年次大会

今後の予定：
2008年度の行事予定
１．日本ホスピス緩和ケア協会北海道支部　第6回年次大会
　日　時：2008年5月17日（土）13:00～17:00
　会　場：北海道医療大学
　　札幌サテライトキャンパス　大研修室
２．第２回多職種教育セミナー（詳細は未定）

（報告　柴田　岳三）

東北支部

支部事務局：岡部医院
代 表 幹 事：岡部　　健（岡部医院）
幹　　事：
北村　博幸（岡部医院）
瀬戸山真理子（岡部医院）
蘆野　吉和（十和田市立中央病院）
鈴木　雅夫（在宅緩和ケアクリニックふくしま）
清水　千世（坪井病院）

▲ 緩和ケア病棟分科会

活動の様子：
東北支部では、今年度の事業の一つに「東北支部における緩和ケア提供施設、事業所、個人の実態調査」を計画しました。会員の拡充を目的に、各県単位で緩和ケアチーム（緩和ケア診療加算届出の有無に関わらず）、在宅療養支援診療所、緩和ケアに専従している診療所、訪問看護ステーションなどにアンケートを送付し、活動内容や入会の意向を確認していく予定です。
各県の実態が明らかになれば、その中から県ごとに幹事を決めていただき、支部活動の運営にあたっていただくなど、協会の啓発に努めていきたいと思います。

今後の予定：
１．第３回日本ホスピス緩和ケア協会東北支部緩和ケア病棟分科会
　　日　時：2008年5月24日（土）　山形市にて開催予定。
２．第２回医学生・研修医のためのセミナー（日程は未定）

（報告　清水　千世）

関東甲信越支部

支部事務局：愛和病院
代 表 幹 事：高宮　有介（昭和大学医学部医学教育推進室）
幹　　事：
長田　　明（つくばセントラル病院）
斎藤　龍生（西群馬病院）
渡辺　　敏（千葉県がんセンター）
三枝　好幸（聖ヶ丘病院）
水戸　將郎（新潟こばり病院）
山田　祐司（愛和病院）
児玉　哲郎（栃木県立がんセンター）
井口　清吾（上尾甦生病院）
林　　彰敏（聖路加国際病院）
西立野研二（ピースハウス病院）
許山　美和（山梨県立中央病院）

活動の様子：
関東甲信越支部は地域的に広く、支部としてまとまった活動ができない事情がある。そのため、より地域に密着した活動を目指し、各県ごとの活動を目指している。各県から、幹事を選出していただき、メーリングリストで連絡を取り合っている。

今後の予定：
第１回　日本ホスピス緩和ケア協会　教育セミナーIN長野
日　時 ： 平成20年3月8日(土) ～ 3月9日(日)
場　所 ： 保科温泉「永保荘」

（報告　山田　祐司）

▲ 甲信地区で行われた症例検討会

東海北陸支部

支部事務局：聖隷三方原病院
代 表 幹 事：井上　聡（聖隷三方原病院）
幹　　事：
谷　　一彦（福井県済生会病院）　　日比野美紀（海南病院）
安達　　勇（静岡がんセンター）

活動の様子：
日　　時：2007年11月23日～11月24日
「教育セミナー IN 福井
ー緩和ケアを院内で、地域で広めようー」
場　　所：福井県済生会病院
参加者数：38名

▼ 発足会での話し合い

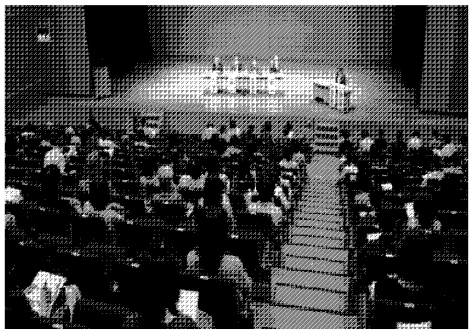
今後の予定：
2008年度は秋頃、名古屋で「教育セミナー」を開催予定。

（報告　井上　聡）

近畿支部

支部事務局：六甲病院
代 表 幹 事：久保山千鶴（六甲病院）
幹　　事：
池永　昌之（淀川キリスト教病院）
川上　　明（洛和会丸太町病院）
柴田　恵子（彦根市立訪問看護ステーション）
月山　　淑（和歌山医大附属病院）
佐井利恵子（東神戸病院）
岡田　圭司（高槻赤十字病院）
山本　一茂（日本バプテスト病院）
堀　　泰祐（滋賀県成人病センター）
安保　博文（六甲病院）
四宮　敏章（国保中央病院）

活動の様子：
本音で話し合える会
大阪・兵庫・滋賀・京都・奈良・和歌山の幹事が企画、運営をし、それぞれの場所で開催とする。
（基本的には日本死の臨床死生研究会の２週間後とする）
日　　時：第１回　平成17年11月（大阪）
第２回　平成18年11月（兵庫）
第３回　平成19年10月（京都）　いずれも土曜日の15時～18時



▲ 滋賀県の４病棟共催による講演会

プログラム：全体会議・分科会・師長会
分科会の内容…「症状緩和」・「コミュニケーション」・「運営」・「心のケア」・「エンゼルケア」
師長会議…１３時～１５時でグループワークとする。

今後の予定：
平成20年11月に予定（第4回ブロック会）京都が幹事

（報告　久保山千鶴）

中国支部

支部事務局：山口赤十字病院
代 表 幹 事：末永　和之（山口赤十字病院）
幹　　事：
石原　辰彦（岡山済生会総合病院）　本家　好文（県立広島病院）
足立　誠司（藤井政雄記念病院）　斎藤　洋司（島根大学医学部麻酔学講座）
正司　明美（山口県立大学）

活動の様子：
・年１回の支部大会を開催し、支部会員のホスピス緩和ケアに関する質の向上及びネットワークの構築を図る。
・がん診療連携拠点病院の緩和ケアチーム、在宅療養支援診療所、訪問看護ステーションに働きかけ、協会への参加を促していく。
・支部会員間のメーリングリストを作成し、情報を共有化する。

今後の予定：
2008年度中国支部大会を2008年4月19（土）・20（日）に広島にて開催。
19日は総会、部会（代表者会議、看護師長会、チームケア部会）を行う。
20日は事例検討会、教育講演を予定。

（報告　末永　和之）

四国支部

支部事務局：松山ベテル病院
代 表 幹 事：山口　龍彦（高知厚生病院）
幹　　事：
藤井　恵子（松山ベテル病院）　松岡　智子（松山ベテル病院）

活動の様子：
今回は、高知の活動状況についてご報告いたします。
高知では昨年１０月から新たに医療法人五月会須崎くろしお病院に１０床の緩和ケア病棟がオープンしています。これで高知県は６施設で73床を有することになります。須崎くろしお病院のある須崎市は、高知市から西に高速道路で３０分の距離にあり、今まで空白であった高幡地域の緩和ケアの砦ができました。
もうひとつの話題は、１９９５年から活動してきた高知緩和ケア研究会が、今年ＮＰＯ法人化され、高知緩和ケア協会へと進化したことです。
理事には緩和ケアに関する様々な組織の代表が網羅されており、これにより、県との協同事業を行うことが可能となりました。既に、県内の全ての医療機関に対する緩和ケア資源についての調査事業が終了し、平成２０年度には国からおりてきた医師に対する教育事業やネットワーク事業などに県と力を合わせ取り組んでゆくことになっています。

今後の予定：
１．高知緩和ケア協会主催「豊かないのち講演会」
　　講　師：小澤　竹俊先生（めぐみ在宅クリニック）
　　日　時：2008年5月17日（土）　13時30分～
　　場　所：高知県民文化ホール（グリーン）
２．2008年度支部会

（報告　山口　龍彦）

▲ 徳島県の４病棟共作のパネル展示

支部事務局：栄光病院
代 表 幹 事：下稲葉康之（栄光病院）
幹　　事：
福重　哲志（久留米大学病院緩和ケアセンター）
井田　栄一（熊本ホームケアクリニック）
牛島千津美（北九州市立医療センター）
小川　美和（さくら病院）
中俣　直子（相良病院）
矢津　　剛（矢津内科消化器科クリニック）
横山　晶子（三州病院）
宮本　祐一（白石共立病院）
吉國　久子（相良病院）
益冨美津代（聖フランシスコ病院）
清田　直人（栄光病院）
萬納寺正清（聖ヨハネ病院）
山岡　憲夫（大分ゆふみ病院）

活動の様子：
九州支部は他地域に先駆け、2000年に支部活動のモデルとして発足しました。
以来、年１回の支部大会開催、地域で開催される各種講演会・研究会への協力と参加促進、九州支部ニューズレターの発行（年１回）といった活動を行いながら、会員施設においてホスピス・緩和ケアに従事するスタッフが臨床現場で抱えている問題点や意識を共有すると共に、ケアの質の向上を目指して地域の教育啓発活動を積極的に行っています。
特に、地域の会員施設が一堂に会する年１回の支部大会では、毎回多様なテーマで基調講演・教育講演を企画し、職種別分科会では小グループに分かれてのディスカッションを行うことで、会員相互の交流から地域連携へとその活動を発展させてゆきたいと考えています。

今後の予定：
2008年度九州支部大会
　　テーマ：「緩和ケア病棟の課題と展望」
　　日　時：2008年5月31日（土）10：00～15：30
　　場　所：アクロス福岡　６階大会議室他
　プログラム：基調講演「緩和ケア病棟のあり方を考える」
　　講　師：末永和之氏
　　教育講演：「症状コントロール」「家族への援助」「チームアプローチ」
職種別分科会：医師部会・看護部会・ソーシャルワーカー部会・パストラルケアワーカー部会

（報告　下稲葉康之）

▲ 九州支部2007年度支部総会

2008年度　ホスピス緩和ケア週間開催報告

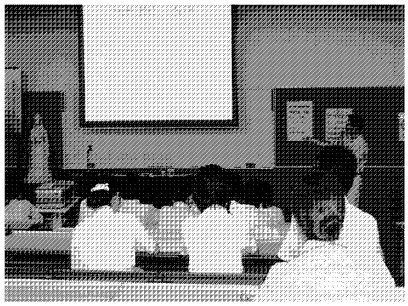
当協会は、「世界ホスピス緩和ケアデー（※１）」の活動に日本として参加するために、「ホスピス緩和ケア週間」（2007年度は9月30日～10月6日）を提唱しています。 第2回目となった2007年度は、隔年に開催されている Voices for Hospices（※２）の運動と重なり、一昨年に引き続き共通のポスターの掲示を各地に呼びかけた他、（財）日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団、NHK厚生文化事業団、NHKとの共催により、ホスピス緩和ケアフォーラムを開催いたしました。
また、協会には、緩和ケア病棟、緩和ケアチーム、在宅ホスピス関係者など、約２８０の施設・団体が加入していますが、全国各地でこの週間に関連した36の企画が開催され、約6780名の参加がありました。
企画担当者からは、「緩和ケアに対して正しい理解を広める良い機会になった」「患者さん・ご家族のニーズを知るきっかけになった」、またハレルヤ合唱を行った施設からは、「世界のムーブメントに繋がっていることが感じられた」等々、本週間の意義が認められる報告が多数寄せられました。

※1「世界ホスピス緩和ケアデー」：2005年にソウルで開催された、第２回グローバルサミットで制定された。期日を10月の土曜日とし、必要とする全ての人にホスピス緩和ケアが提供されることを願い、その理念を啓蒙し、活動を広げていくことを目的としている。

※2「Voices for Hospices」：1991年よりスタートした、歌声で世界を結ぼうという運動。期日を隔年10月の土曜日とし、午後７時30分（現地時間）にヘンデル「メサイア」の一節「ハレルヤ」を歌い、各国の時差があることで歌声が地球を一周する。

［当日の様子］

▲音楽療法士によるコンサート
薬師山病院・日本バプテスト病院合同



▲病棟外のスタッフを対象とした勉強会
原土井病院

▲ホスピス緩和ケア関連のパネル展示
岡山済生会病院

▲ボランティアによる作品の展示
広島県立広島病院

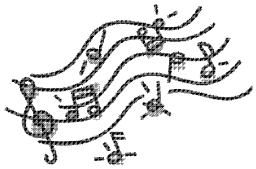
▲一般の方を対象としたフォーラム
松山ベテル病院

▲ご遺族とスタッフの交流会
栄光病院

企画の内容

①ホスピス緩和ケアの考え方やケアの実際を紹介する一般向けの講演会、フォーラム…１３企画
②がんの疼痛治療などに関する専門家対象の講演会、研究…５企画
③病院ロビーやお茶会でのコンサート…６企画
④ホスピスの歴史や活動を紹介するパネル展示会…５企画
⑤緩和ケア病棟見学会…４企画
⑥遺族会、職員懇親会…３企画

ホスピス緩和ケアフォーラム報告



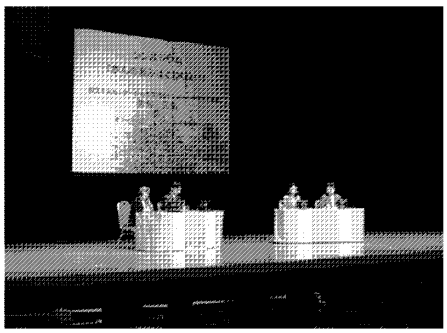
期　日：２００７年１０月　６日（土）　16:30～19:45
場　所：笹川記念会館　国際会議場（東京都港区）
参加者：４６４名

（財）慈山会医学研究所付属坪井病院
看護課長　清水　千世

「がんと共に生きる」～痛みの無い穏やかな日々～をメインテーマに、最初に日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団の柏木理事長からホスピスケアの歴史的背景やわが国におけるホスピス緩和ケアの現状、フォーラムの目的についてご挨拶をいただき、シンポジウムとコンサートの２部構成でフォーラムが始まった。

第１部は、子宮頸がんと診断され闘病経験をお持ちの女優の仁科亜季子さんを迎え、国立がんセンターがん対策情報センター緩和ケア医師の的場元弘さん、がん専門看護師でオフィス梅田の代表梅田めぐみさんの３人によるシンポジウム「がんの痛みはこわくない」が企画された。総合司会の後藤美代子さん（元ＮＨＫアナウンサー）の絶妙な進行で、がんの痛みと鎮痛剤の使用方法、精神的ケアを含めた全人的な苦痛への対応、上手に医療を受けるための地域医療連携のシステム作りについてと流れるように討論が進められた。医師の立場から、看護師の立場から、患者の立場からと内容が整理され、それぞれの職域や役割、また療養する上での不安や疑問点に対する対応策など一般の参加者にも分かりやすい内容で、身近な問題として捉えることができ、安心と勇気をいただくことのできたシンポジウムであった。シンポジウムの終了後に山崎会長から当協会の役割と今後の方向性についてのお話あり、休憩を挟み、第２部へと続いた。

第２部は「音楽でつなぐ命の響き」と題し、聖路加国際病院理事長の日野原重明先生の「ホスピスを思いながら、音楽をもって世界中のホスピスをつなごう」という心温まるメッセージから始まり、ピースハウスホスピスでチェリストのお兄様を看取られたバイオリニストの徳永二男さん（元ＮＨＫ交響楽団コンサートマスター）のバイオリンとピアノの二重奏、中館伸一さん(日本合唱協会)指揮によるエンジェリック・ボイスの厳かな歌声、そしてＬＰＣ混声合唱団も混じりハレルヤの合唱と感動と陶酔であっと言う間に時が立つのも忘れてしまったプログラムであった。



2008年度世界ホスピス緩和ケアデー＆ホスピス緩和ケア週間

２００８年度の「世界ホスピス緩和ケアデー」は、**１０月１１日（土）**、テーマは
「**Hospice and palliative care: a human right**」です。
「ホスピス緩和ケア週間」は、世界ホスピス緩和ケアデーを最終日とした
１０月　５日（日）～１０月１１日（土）の期間となります。
詳細につきましては後日ご連絡いたしますが、皆様には「ホスピス緩和ケア週間」を通したホスピス緩和ケアの啓発、普及活動へのより一層の取り組みをお願い申し上げます。

国際会議派遣報告１

3rdWorldwide Summit for national associations of hospice and palliative care派遣報告書

日本ホスピス緩和ケア協会理事・教育専門委員、国際交流委員
筑波大学大学院人間総合科学研究科　木澤　義之

１．はじめに

わが国の持つ死の施設化、治療の中止や死のとらえ方などの問題は特に東アジア諸国と共通しており、その問題を共有してアジア独自、わが国独自の緩和ケアの概念を持つことが非常に大切な課題であると考えられる。また、世界にはアジア、アフリカ、中近東、東欧、南アメリカを中心に緩和ケアが未整備な地域が散在しており、わが国が経験してきた多くの課題を持っている国も少なくない。このように各国が持つ緩和ケアの課題を共有し、ともに解決していくために2003年からWorldwide Summitが開催されている。第１回は2003年オランダ、ハーグで開催され2005年はソウル、今回2007年はナイロビで開催された。日本ホスピス緩和ケア協会では、今後の協会活動の方向性を世界レベルの見地から明らかにするとともに、新たに設立されるWPCA（The Worldwide Palliative care Alliance）でどのような活動を行い、日本がどのような役割を果たすかを明らかにするために国際交流委員会から派遣を行った。

２．派遣の目的

派遣の目的としては以下の４点が挙げられる

（１）今後の協会活動の方向性を世界的見地から明らかにする
（２）新たに設立されるWPCA（The Worldwide Palliative care Alliance）が何を目的にし、どのような活動を行うかについて意見交換を行う
（３）WPCAにおいて日本がどのような役割を果たすべきかを明らかにする
（４）世界各国の緩和ケア関係者と交流を深め、今後の活動、日本への招請の可能性を探索する

３．派遣者・派遣期間

（１）派遣者：国際交流委員木澤義之（筑波大学大学院人間総合科学研究科）
（２）派遣期間：平成19年9月14日～9月21日

４．派遣報告

9月16日にconference Registrationとwelcome receptionが行われ、17-18日とWPCAがこれからどのような活動を行うかをグループワークで明らかにし、それを全体で共有するという内容であった。
また、各国がその国の緩和ケアの概要をポスターセッションで発表し共有することも行われ、日本からもポスターを持参し、掲示した。
WPCAについては以下のことが合意された。また次回のWPCAのミーティングは2009年 2月11、12日にデリーで行われることが決定した。

５．考察

世界の緩和ケアの流れを改めて知ることができた会議であった。わが国自身の課題としては地域緩和ケアの充実、緩和ケアの教育システムの充実、小児緩和ケアプログラムの開発、非がん患者の緩和ケアプログラムの開発などがあげられる。
これらについては各関連機関と協力し、綿密なタイムスケジュールを作り、システマティックに取り組む必要があると考えられた。
また、国際協力の観点で言えば、可能な限りWPCAと連携し、アジアアフリカを中心とした世界各国の緩和ケアの発展に役割を果たしていくことが必要であると考えられた。今後もWPCAには定期的に派遣を行う事が望ましいと考えられる。

付録　WPCAについて

名称：The Worldwide Palliative care Alliance（WPCA）
目的：世界中で質が高く、アフォーダブルな緩和ケアが享受できるようにする
使命：世界各地域の緩和ケア団体（例：APCA、EAPC、APHN）や国家レベルのホスピス緩和ケア団体をサポートすることを通して世界中で質が高く、アフォーダブルな緩和ケアが享受できるようにする
目標：（1）緩和ケアの啓発活動を行う
（2）世界各地域の緩和ケア団体や国家レベルのホスピス緩和ケア団体をサポートすることを通して質の高い緩和ケアプログラムの開発と実行を行う
（3）世界各国で緩和ケアの立ち上げを行う際のリソースとなる
（4）緩和ケアの声を後押しする
（5）緩和ケアに関するアドボカシーをあらゆるレベルで支援する（国際、国家、地方、地域）

▲サミット出席者の集合写真

国際会議派遣報告２

The 7th Asia Pacific Hospice Conference 2007派遣報告書

日本ホスピス緩和ケア協会理事、国際交流委員
オフィス梅田　梅田　恵

9月27日から 29日にマニラでAsia Pacific Hospice Conference 2007（以後APHCと略す）が開催された。多くのアジアの人々との交流やカンファレンスを通して、アジア諸国でのホスピス・緩和ケアの成り立ちや現状に触れることができた。

韓国は、2006年現在、130以上のホスピスケアを提供しているサービスがあり、約5.4%がホスピスで亡くなっている。2006年にHospice Nurse Specialistシステムが発足し、韓国の厚生省からの補助金を元に、多くの研究者がHospice Law や返済システムに関する研究に取り組んでいる。タイには、多くのエイズホスピスが存在する。しかし、近代型のホスピス・緩和ケアは開始段階である。台湾では、The National Cancer Control Program や‘The Hospice Palliative Medical Act’の制定を受け、2007年現在、32の入院型ホスピスと59の緩和在宅ケアプログラム、38のShare Care Programが存在し、死亡者の30%が緩和ケアを受けている。ベトナムでは、感染症や交通事故による外傷といった急性疾患が大きな問題となっており、ヘルスケアスタッフや国民の中でのホスピス・緩和ケアへの関心は高まっていないようだ。フィリピンでは、2002年現在、20以上のホスピスプログラムが存在している。その範囲は、小規模のホームケアや疼痛、緩和ケアのクリニックから、病院ベースの緩和ケア相談サービスに及ぶ。まだ、ホスピスに関する法律など制定されていない。

カンファレンスには 500人近い参加があり、中でも台湾、韓国からの参加者が多く、積極的に発表し行動されていたことが印象に残っている。発表の内容は、社会システムにホスピス緩和ケアをいかに浸透させていくか、どのようなシステムでケアを充実させるかなど、教育や政策、システムについての話題が多く、がん対策基本法を受けて大きな発展のときを迎えている日本でのあり方を考えることができた。日本におけるホスピス・緩和ケアの歴史はアジア諸国の中では早くから取り組みが始まっている。医療水準や生活水準の高い日本は、自国のことだけでなく、もっとアジアや世界での果たすべき役割を認識していかなければならないのではないだろうか。また、あらためて、人の尊厳やＱＯＬを求めるホスピス・緩和ケアの本質を考える機会ともなった。がん対策で、足元を見失いがちであるが、ホスピス・緩和ケアの本質を見失わないことを心がけていきたい。